

白藍塾オリジナル

2023年度 入試小論文分析&解答のヒント

2023年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

● 慶応・文学部

長めの要約問題+短めの小論文問題という出題形式、設問内容、指定字数等は例年通り。ただし、課題文は、近年続いた研究者による学術的な文章ではなく、芸術のあり方について芸術家自身（演奏家）が語った文章で、書き出しもエッセー調だったり、かなり読みやすい。

論理的に一貫した文章ではないので要約しにくい、無理やりまとめると次のようになるだろう。「現代では、あらゆる事象が芸術となる可能性を持ち、芸術と非芸術の境界が曖昧になっている。それは、マルセル・デュシャンの試みのように、何かモノを作るのではなく、『芸術とは何か』という問題提起自体が芸術となりうる新しい芸術のあり方を反映している。日本では、そうした発想や思考に重きを置く作品を『アート』、従来の鍛錬された技術の上に成り立つ作品を『芸術』と呼んで線引きしている。だが、どちらにせよ、芸術は目に見える世界の向こう側にある未知の世界へと向き合おうとする、人間にとって根源的な営みであることに違いはない」

設問Ⅰは、例によって全文要約が求められている。以上のような内容を、字数に合わせてまとめるとよい。

設問Ⅱは、「人間の創造性」について自分の考えを述べるのが求められている。必ずしも芸術に限定する必要はないが、課題文を踏まえて考えるのであれば、やはり芸術の創造について論じるのが正攻法だろう。その場合、伝統的な芸術よりも発想や思考の創造に重きを置く現代芸術（日本で言う「アート」）が主流になっている現代の芸術創造のあり方の是非を問題提起するのが、最も論じやすいはずだ。

イエスの立場であれば、例えば、「人間は、日常の秩序を破壊し、未知の世界へとアプローチするために芸術を創造する。日常の事物から既成の意味を引き剥がし、そこに新たな価値を見出そうとする現代芸術は、一見奇抜に見えるが、実は人間の根源的な創造性の現れだ」などのように論じることができる。

一方、ノーの立場に立って、「発想に重きを置く芸術は記号的なものにすぎない。鍛錬された技術に基づく芸術こそが、人間の営みの根源に触れる真の創造性の現れだ」などと論じることも可能だろう。

もちろん、「アート」と「芸術」の違いにこだわらず、何らかの具体例に即して芸術の創造性について論じて、十分説得力のある内容になるはずだ。

* 執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://hakuranjuku.co.jp>